

一「平成流」の天皇制一

「開かれた皇室」への反発

- ・ 人々に受け入れられる皇室

皇太子が小和田雅子と婚約（1993年1月）：「私が一生、全力でお守りします」

1991年 雲仙普賢岳（長崎県）へのお見舞い／1995年 阪神淡路大震災

- ・ 『宝島30』の記事（1993年8月号「皇室の危機」）

『週刊文春』『週刊新潮』などにも大きく取り上げられる

→美智子皇后の失声症へと発展

「平成流」とメディア報道の変化

- ・ 「戦後50年」（1995年）における天皇

1994年2月小笠原（硫黄島）／1995年7月広島・長崎、8月沖縄・東京都慰霊堂

戦没者追悼式「ここに歴史を顧み、戦争の惨禍が再び繰り返されぬことを切に願い」

- ・ 定型化するマスメディアの報道

即位10年（1999年11月）の記者会見およびマスメディア

戦争は天皇に語らせ、マスメディアは「開かれた皇室」というまとめ

即位20年や天皇傘寿をめぐるマスメディア

20年（2009年）：「象徴」としてのあり方＋戦争→皇統継続の問題という会見順

傘寿（2013年）：戦争と復興、80年のあゆみ→公務の引き継ぎという会見順

= 戦争の記憶を定着させる存在としての天皇像

天皇の自己意識

・即位 20 年目の記者会見（2009 年 11 月 12 日）において

記者「この 20 年間、天皇陛下は「象徴」としてどうあるべきかを考え、模索しながら実践してこられた日々だったと思います」「平成の時代に作り上げてこられた「象徴」とは、どのようなものでしょうか」

天皇「私は、この二〇年、長い天皇の歴史に思いを致し、国民の上を思い、象徴として望ましい天皇の在り方を求めつつ、今日まで過ごしてきました。質問にあるような平成の象徴像というものを特に考えたことはありません」

皇后「戦後新憲法により、天皇のご存在が「象徴」という、私にとっては不思議な言葉で示された昭和 22 年、私はまだ中学に入ったばかりで、これを理解することは難しく、何となく意味の深そうなその言葉を、ただそのままに受け止めておりました。御所に上がって 50 年がたちますが、「象徴」の意味は、今も言葉には表し難く、ただ、陛下が「国の象徴」また「国民統合の象徴」としての在り方を絶えず模索され、そのことをお考えになりつつ、それにふさわしくあろうと努めておられたお姿の中に、常にそれを感じてきたとのみ、答えさせていただきます」

まとめ

- ・天皇の自己意識と「平成流」
- ・メディア（社会）の関心の変化

参考文献

- ・河西秀哉『明仁天皇と戦後日本』（洋泉社新書、2016 年）
- ・「NHK スペシャル」取材班『日本人と象徴天皇』（新潮新書、2017 年）